

## 男性のジェンダー意識とケアへの関与：東アジアと欧米の都市圏データの比較から

○石井クンツ昌子（立教大学）、多賀太（関西大学）、伊藤公雄（京都産業大学）、植田晃博（笹川平和財団）

### 研究背景と目的

欧州連合（EU）では、「ケアリング・マスキュリニティ」（ケアする男性性）というキーワードを用いて、男性に育児などケア役割への関与を促し、男性をジェンダー平等に向けて変化させるための諸施策が展開されている。一方、日本でも1990年代初頭から男性の育児や介護の必要性が指摘され、ジェンダー平等が促されてきており、2000年代後半からは「育メン」が注目を浴びてきているが、父親の育児参加は母親と比較するとかなり少ないのが現状である。また、東アジアの国々と比較しても、日本の父親の育児参加は少ない傾向が指摘されている（ベネッセ教育総合研究所2011）。このような背景を基に、本研究では東アジアと欧米の都市圏在住男性の属性と「男性性」に関する意識的側面の類似点と相違点を明らかにして、男性たちがどの程度、家庭内のケア（家事、育児）に関与しているかについての国際比較をすることが主な目的である。

### 研究方法とサンプル

データは笹川平和財団の助成を受けて、東アジア5都市（東京、ソウル、台北、上海、香港）と欧米（イタリア、ドイツ、ノルウェー、米国）の都市圏在住の20歳～69歳の男性からWEB調査により2018年6月～2020年3月に収集された。サンプル数は各国約1000名（ノルウェーは300名）の合計約8300名である。調査対象者の平均年齢は30代後半から40代前半が多いが、台北男性が36.2歳で最も若く、ノルウェー男性は51.1歳で年齢が最も高い。学歴に関して東アジアと欧米の諸都市で多いのは「4年制大卒者」であるが、ソウルでは66.7%で最も多く、逆に台北は47.6%で一番少なかった。欧米ではノルウェーで50.2%が大卒者であったが、米国では33.9%に留まった。東アジア5都市で一日の平均労働時間が最も長いのはソウルの8.75時間で、次いで台北と東京が長く、最も短いのは上海であった。欧米では、約半数近くの男性の労働時間は一日平均で8～10時間未満であった。

### 主な結果

ケア関与のひとつである家事、特に「食事の用意」を最も頻繁にしていたのはノルウェーの男性（63.7%が「ほぼ毎日」あるいは「週に4～5回程度行っている」）で、次いでドイツ（61.2%）、米国（60.4%）、イタリア（50.3%）の順であった。東アジアの男性で最も頻繁に「食事の用意」をしていたのは上海（44.9%）の男性であった。育児に関しては、子どものいる男性に「子どもの着替えや身支度の世話」の頻度を尋ねたところ、欧米では米国（41.9%）、東アジアでは台北（41.5%）の男性が最も頻繁に子どもの世話をっており、反対に子どもの世話への参加が少なかったのは東京（21.1%）と韓国（20.4%）の男性であった。

意識的な側面として家庭内外の男女の役割に注目したが、「男性は外で仕事、女性は家庭を守るべきである」に対して「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」と回答した男性が最も多かったのは上海（62.3%）であり、他の東アジアの都市で最も少なかったのはソウル（32.5%）であった。欧米では米国男性の33.5%が最も多く、反対にノルウェーでは13.8%と低かった。また「できれば女性の上司を持ちたくない」に対しては、アジアの諸都市在住男性で「そう思う」あるいは「どちらかといえばそう思う」と回答した人が欧米と比較して多い。その中でも、香港では56.4%の男性がそのように感じていて、次いでソウル（52.2%）、東京（49.8%）、香港（49%）、台北（47.2%）の順であった。欧米では女性の上司を持ちたくない男性が最も多かったのは米国（30.8%）であり、少ないのはイタリア（22.9%）であるが、アジアの男性と比較して、欧米男性のほうが女性上司を持つことに対してあまり抵抗がないことがわかった。

東アジアの大都市在住の男性を対象として家事頻度とその規定要因を検討した結果、職場の女性観が伝統的であるほど、家事頻度が高いことなどがわかった。育児に関しては、末子年齢が低いこと（東京、ソウル、台北）、本人の年齢が低いこと（ソウル、上海）、配偶者の収入が高いこと（台北）、性別役割分業観が平等的であること（上海、香港）が父親の育児頻度を高くしていた。本報告では、欧米男性の家事・育児頻度を規定する要因についても触れる予定である。

（キーワード：ケアリング・マスキュリニティ、男性のケア関与、国際比較）